



# 呼称に見る文化的「建前」の検証

—アメリカと日本のビジネス場面を分析して—

北 山 環

## 1. 序

Brown and Levinson (1978, 1987: 62) は、その「ポラトネス」理論の中で、人間には、他者に受け入れてもらいたい仲間意識を持ちたいという欲求 (“positive face”) と自分の領域を侵害されたくないという欲求 (“negative face”) が存在すると述べている。これらの二面性について、Scollon et al. (1995, 2012: 47-49) は、それぞれへの方略を、“involvement or solidarity politeness” と “independence or deference politeness” とし、コミュニケーション時にはどちらも現れるが、配分により話し手の言語表現に違いが出て来ることを示唆している。話し手が個々の状況での言語活動においてどのような戦略を選択するかは、聞き手との親疎の距離 (“the ‘social distance (D)’”), 力関係 (“the relative ‘power (P)’”), 負荷の程度 (“the absolute ranking (R) of imposition”) (Brown & Levinson 1978, 1987: 74) が要因とされ、それはあくまでも話し手が個人として判断することになる。その一方で、このような独立した個人という概念に対して、社会の中に組み込まれた個人への考察の必要性が論じられてきた。Scollon et al. (1995, 2012: 47-48) は、西洋の “self-motivated ‘self’ を集団内の成員としての “self” の基準として使うことは適切でないとし、Matsumoto (1988) と Ide (1989) は、社会の中に位置づけられた個人という視点の重要性を説いた。そこでの個人は、自分が属する集団から期待される戦略に従って、表現を選ぶのである。そして、この個人の概念の対比は、二つの自己 (“self”) の解釈の存在を明示し、更に、個人主義 (“individualism”) と集団主義 (“collectivism”) という二つの文化<sup>(1)</sup> 構造の展開へとつながっていく。

---

原稿受理日 2013年9月11日

(1) ここで言う文化とは、ある特定の集団の大部分の成員に共通する社会構造、価値観、行動形態の総体であり、時代の移り変わりや社会生活の変貌に対応して変化する一方で、底流として成員の生き方を決定し続ける主要概念とその表れと定義する (北山 2013c: 10)。Triandis (1972) の “subjective culture,” Hofstede (1980, 2001) の “collective level,” Scollon and Scollon (2002) の “anthropological culture” と同じ範疇に入るものである。

個人主義文化圏での自己と集団主義文化圏での自己は、“[E]quity linked with individualism and to an independent construal of self, and association linked with collectivism and to an interdependent construal of self” (Spencer-Oatey & Franklin 2009: 111) という基本的な原則の提示となるが、「個人主義と独立型自己」対「集団主義と依存型自己」の図式は、Triandis (1989), Markus and Kitayama (1991), Morisaki and Gudykunst (1994), Gudykunst et al. (1996) にも既に見られるところである。また, Greenwald and Pratkanis (1984) と Baumeister (1986) の提示した “private self,” “public self,” “collective self” は Triandis (1989: 507) により, 「個人主義文化と “private self”」, 「集団主義文化と “public self” や “collective self”」の関連が論じられている。「独立型」 “private self” は西洋の, 「依存型」 “public and/or collective self” は日本の特徴的な自己の形態とされ, それは, 個人が社会の基本であり状況を超越した一貫性のある自己か, 社会が優先され個人は変化する状況に対応していく自己かの違いである (Backnik 1982: 11; Kasper 1997: 381)。そして, 個人主義社会と “self-face concern” (Ting-Toomey and Oetzel 2002: 145-147) が, 集団主義社会と “other-face and mutual-face concerns” (ibid.) が強く結び付いているとされる (北山 2013c)。

... the Western model based on the complex of individuality, autonomy, quality, rationality, aggression, and self-assertion ... the traditional [Japanese] complex of collectivism, interdependence, superordination-subordination, empathy, sentimentality, introspection and self-denial... (Lebra 1976: 257)

「ポライトネス」が意味するものを個人主義の「独立型自己」と集団主義の「依存型自己」の観点から考察していくと, 決定的な相違点が明らかとなる。それは, 前者の場合は Brown and Levinson (1978, 1987) の言う “positive face” と “negative face” の両方を満たすことが同様に「ポライトである」, つまり, 相手に近づく “positive politeness” と 相手から離れる “negative politeness” が存在するが, 後者では, 相手と距離を置くことが「ポライトである」とみなされるということである。Ide et al. (1992) の調査では, アメリカ人は “politeness” に “friendliness” が含有されると答えたのに対し, 日本人は二語を関連付けることはなかった。アメリカ文化は, 「打ち解けること (“breaking the ice”)」を重視し, “You and I are equals.” (Sakamoto & Naotsuka 1998: 1) を基本とする「水平型文化」とされている。日本文化は, 与えられた「場」 (Nakane 1967, 2005:

30-49)を「わきまえ(“discernment”)], 社会規範に則って振舞う(Hill et al. 1986: 348)「垂直型文化」<sup>②</sup>とみなされている。これらは、それぞれの文化の根本的な信条、言わば、「建前」である。

そのような両文化の特徴を最も端的に映し出す言語行為の一つが「人の呼び方」であると言える。呼称は様々な個別の“speech acts”(Austin 1962)と共起するが、全体としての傾向を捉える上でも有用な言語分析の手段である。

本著では、ビジネスをテーマとしたアメリカと日本の映画・テレビドラマを素材として呼称を抽出し、その使用分布がアメリカ文化と日本文化における前述の「建前」を反映しているかどうかの検証を試みる。第2節は「素材としての映画選択」、第3節は「分析対象となる呼称の範囲と分類」、第4節は「アメリカ映画に見る呼称」、第5節は「日本映画に見る呼称」、第6節は「米語と日本語の呼称比較」、第7節は「結論」である。

## 2. 素材としての映画選択

映画を呼称の抽出素材とした理由(北山 2004:74)は、(1)背景の情報とともに会話の流れが入手できる、(2)発話する人物のパーソナリティが得られる、(3)日常の会話と類似した状況が表現される、(4)表現を集中的に収集し易い、(5)研究や学習目的ではないので会話の展開に作為が見られない、(6)簡単に入手しうる、ことである。抽出対象を出来得る限り一定に保つために、原則としてニューヨークか東京近辺に位置する大企業(映画説明と描写場面で判断)を扱った映画に限定し、時代背景は、1980年以降の直近の30年間とした。会社内の人間関係に加え、社外の場合は典型的には顧客と業者のように直接仕事上の関わりを持つ関係の日常的な業務において用いられる呼称に限り、映画の中に現れる家族、恋人、友人等の個人的な会話や空想等の非日常的な場面は含まれていない。*The Insider*のBergman(ジャーナリスト)とWigand(内部告発者)の関係は直接的な商業取引ではないが、Bergmanにとっては業務の一環であるので、会社外と同レベルの人間関係とし、*Wall Street*のGekkoとBudの関係は、社外の顧客と投資コンサルタントとしている。

上記の条件を満たしたアメリカ映画は、*The Devil Wears Prada* (2006), *The Insider* (1999), *The Late Shift* (1993), *Nine to Five* (1980), *Other People's Money* (1991), *The Secret of My Success* (1987), *Two Weeks Notice* (2002), *Up Close & Personal* (1996)

---

② Nakane (1970, 1998: 23)は、“vertical”と“horizontal”という概念を導入し、上司と部下の関係は「垂直型」、同僚間は「水平型」としている。

(フィラデルフィアとニューヨーク), *Wall Street* (1987), *Working Girl* (1988) の10本, 日本映画は, 『ハゲタカ』(2007), 『ハゲタカ』(2008), 『ヘッドハンター』(1990), 『陽はまた昇る』(2002) (1970年代終盤の時代設定), 『兜町』(1989), 『課長 島耕作』(1992), 『課長 島耕作』(2008), 『課長 島耕作 2 香港の誘惑』(2008), 『君たちに明日はない』(2010), 『金融腐食列島 呪縛』(1999), 『金融腐食列島 再生』(2002), 『燃ゆるとき』(2006), 『レガッター—国際金融戦争』(1999), 『左遷』(1990), 『戦士の資格』(2008) (中堅企業), 『社葬』(1989), 『集団左遷』(1994), 『出世と左遷』(1996), 『空飛ぶタイヤ』(2009), 『鉄の骨』(2010) の20本である。

### 3. 分析対象となる呼称の範囲と分類

呼称領域として分類されている三つの品詞, “pronouns,” “verbs,” “nouns” (Braun 1988: 7) のうち, 呼称名詞には, 文中で誰かに言及するために使用される場合と文構造から独立して誰かに呼び掛けるために用いられる場合がある (ibid.: 11; Leeds-Hurwitz 1980: 2; Levinson 1983: 70-71; Quirk et al. 1985: 773; Thomas 1995: 154; Leech 1999: 107; Suzuki 1973, 2010: 146, etc.)。ここでは, 呼称名詞の後者の出現分布を取り上げる<sup>③</sup>。呼び掛けとしての呼称名詞は, 文頭, 文中, 文尾に現れ, 聞き手を限定したり, 注意を促したり, 関係作りのために使われたりする (北山 2012) が, ここでは呼称使用の目的を特定せずに全てを同基準の分析対象とする。

英語と日本語の呼称に関してはこれまで多くの分類方法が提示されてきた (Quirk et al 1985: 773-775; Braun 1988: 9-10; Leech 1999: 110; Ide 1982: 358-359; Kinsui 1991: 100; Kanai 2002: 83-91, etc.)。それらの主な相違点は, 対称詞 (二人称詞), 職業名, 地位名, “epithet (通り名)” 等の扱いである。その中で, 全ての範疇を簡潔に網羅した Leech (1999: 110-111) の分類を例として以下に挙げる。

Leech's types:

- A. Endearments (e.g. *darling, honey, love, sweetie*)
- B. Family terms (e.g. *dad, mum*)
- C. Familiarizers (e.g. *guys, buddy* (AmE), *man* (AmE), *mate* (BrE))

③ Leech (1999: 107) は, 呼称名詞の前者 (“terms of address” or “forms of address”) の機能と区別して, 後者を “vocatives” と呼び, その働きを, “[a] nominal constituent loosely integrated with the rest of the utterance” としている。

- D. Familiarized first names (e.g. *Jackie, Marj*)
- E. First names in full (e.g. *Jennifer, Thomas*)
- F. Title and surname (e.g. *Mrs. Johns, Mr. Graham*)
- G. Honorifics (e.g. *sir, madam*)
- H. Others (e.g. *you, Uncle Joe*)

上記の Leech (ibid.) による分類では、対称詞 (“you”), 職業名 (e.g. “waiter”), 地位名 (e.g. “doctor”), “negative epithet (e.g. “bastard”)(小田 2010: 139) は “H. Others” に, “positive epithet (e.g. “my dear”)(ibid.) は “A. Endearments” に組み入れられている。英語と日本語で共通の分類方法を使用するためには、役職名、会社名、名字、様々な接尾辞という日本語特有の項目も不可欠である。今回の検証目的が呼称の「丁寧さ」の分布であることを考え合わせると、英語と日本語で使用される呼称の種類が “positive politeness strategy” (Brown and Levinson 1978, 1987) に基づくものなのか, “negative politeness strategy” (ibid.) の表現なのかを特定しなければならない。そのために、前者を “Familiar Forms (親称),” 後者を “Polite Forms (敬称)”<sup>(4)</sup> として以下に提示し、抽出呼称の分析基準とする。“Familiar Forms” は個人名、ニックネーム等、相手に近付く手段となる呼び方であり、対称詞のように相手を直示するものを含む。これに対して, “Polite Forms” は役職名やタイトル付きの名字等、相手から距離を保ち、直接名指ししない呼び方である。尚, “familiar” が “polite” を意味するかどうかに関しては、英語と日本語で違いがあることは前述の通りである。ビジネス場面からの抽出であるので家族に対する呼び掛けは分類から省いている。また, “driver” や “waiter” のような職業名も分析対象外であるため加えてはいない。

Familiar Forms:

- (1) Endearments (e.g. *darling*) (Leech 1999: 110–111)
- (2) Familiarizers (e.g. *guys, buddy*) (ibid.)
- (3) Familiarized first names (e.g. *Jackie*) (ibid.)
- (4) Surname and familiar suffix (e.g. *Yamada-kun*)
- (5) Surname (e.g. *Jones, Yamada*)

---

(4) 日本語の呼称分類は、Kitayama (2013b: 452–453) による。また「親称」「敬称」は滝浦 (2008) の使用用語である。

- (6) First name and polite suffix (e.g. *Mari-san*)
- (7) First name and familiar suffix (e.g. *Yoshio-kun, Mari-chan*)
- (8) First name (e.g. *Catherine, Yoshio*)
- (9) Personal pronoun/noun (e.g. *you, anata, kimi, omae*)
- (10) Others including nicknames (e.g. *shinjin, oyaji, minna, everyone, Bud Fox, Joggy, bastard*)

Polite Forms:

- (1) Position title (e.g. *kachô*)
- (2) Surname and position title (e.g. *Yamada-kachô*)
- (3) Title and surname (e.g. *Mr. Graham, Mrs. Johns*) (Leech 1999: 110–111)
- (4) Surname and polite suffix (e.g. *Yamada-san, Yamada-han, Yamada-sama*)
- (5) Company name and polite suffix (e.g. *Sony-san*)
- (6) Honorifics (e.g. *sir, madam, sensei, o-kyaku-sama*)
- (7) Function/role (e.g. *gichô, bosu, boss*)
- (8) Title by appointment (e.g. *congressman*)
- (9) Others including a term addressing a senior in age (e.g. *senpai, mina-sama-gata, kachô-san*)

呼称を抽出する領域は、会社内では上司から部下へ、部下から上司へ、同僚間、社外では顧客（支払者）から業者（被支払者）へ、業者から顧客へ、同じ地位レベルの人間同士、という6方向に分け、日本文化の典型的な発想（中根1967, 2005；土居<sup>5)</sup>1971, 2005；和辻1979, 2006, etc.）とされる所属集団（ウチ）と所属集団外（ソト）の意識がアメリカ文化でも存在するののかも考察する。

#### 4. アメリカ映画に見る呼称

アメリカ映画のビジネス場面から抽出された会社内の呼称は表1、会社外の呼称は表2の通りである。

---

(5) 土居（1971, 2005）は、日本において西洋的な意味での個人の自由が発達しなかった理由として集団が同心円的な構造を作っているか、或いは集団が並列するだけで相互に交差することがなかったからであると論じている（北山2007: 68）。

#### 4.1 会社内の呼称

表 1：会社内（うち）の呼称分布（Familiar Forms in italics）

上司→部下（162例）		部下→上司（203例）		同僚間（59例）	
<i>FN</i>	120（74.1%）	<i>FN</i>	86（42.4%）	<i>FN</i>	37（62.7%）
<i>FFN</i>	28（17.3%）	<i>TLN</i>	66（32.5%）	<i>FFN</i>	15（25.4%）
<i>Endearments</i>	5（3.1%）	Honorifics（“sir”）	33（16.3%）	<i>LN</i>	4（6.8%）
<i>Familiarizers</i>	5（3.1%）	<i>FFN</i>	10（5.0%）	<i>Endearments</i>	2（3.4%）
<i>LN</i>	2（1.2%）	<i>FLN</i> （“Joggy”）	7（3.4%）	“everyone”	1（1.7%）
<i>Full Name</i>	1（0.6%）	“boss”	1（0.5%）		
<i>swear words</i>	1（0.6%）				

FN: First Name; FFN: Familiarized First Name; LN: Last Name; TLN: Title+Last Name; FLN: Familiarized Last Name

##### 4.1.1 上司と部下間の呼称

上司から部下へは個人名の使用が圧倒的に多く（91.4%）、他には、“honey, darling, my dear, dear” という“Endearments”と“girls, guys, kid, pal”といった“Familiarizers”の使用が6.2%で、合わせると97.6%に及ぶ。“Polite Forms”は用いられていない。これに対して、部下から上司への呼称は、個人名が47.4%と最も多いものの、タイトルを付けた名字と“Honorifics”の“sir”を合算すると48.8%になり、この領域では敬称の優位性が認められる。部下が上司を名字の略称（“Joggy”）で呼ぶのは、*Other People's Money*において、社長の Coles が会長の Joginson を呼ぶ時に使われているのが殆どで、長い付き合いでもあり、会長が個人名の Andrew ではなく Joggy を使うことを自ら望んでいるからである。対等でない関係において親密さの流れを作るのはあくまでも目上である（Braun 1988: 16; Argyle 1994, 1995: 141-142）。*Working Girl* の Tess のように上司から言い出す前に相手を個人名で呼んでしまうと上司の機嫌を損ね、面目を失わせることになる（“And call me Catherine.” Parker to Tess）。

... in the progress towards intimacy of unequals, the superior is always the pacesetter initiating new moves in that direction. The superior is the pacesetter because the willingness of the person of lower status to enter into association can be taken for granted and there is little risk that a superior will be rebuffed whereas the risk would be great if the inferior were to initiate acts of association. ... Each new step towards friendship is, ... initiated by the person of higher status. (Brown & Ford 1964: 244)

通常は個人名で呼び合う関係であっても、状況により「タイトル+名字」で呼ばれることを要求する場合がある。*The Insider* で渾身の原稿を削除されたことに激怒したジャーナリストの Wallace は、宥めに入った法務担当重役の Caperelli がいつも通り個人名を使って、“Mike, Mike, Mike.” と呼び掛けたところ、“Mike? Mike? Try Mr. Wallace. We work in the same place. It doesn't mean we work in the same profession.” (02:02:23) と怒りを一層露わにする。Caperelli は上司であるが、年配の Wallace よりも若く女性である。経営者側への憤りを感じている Wallace は、そのような上司に対し、業務内容からくる立場の違いを重視し、自分の領域に受け入れたくないという「本音」を表わして個人名で呼ばれることを許容しない (北山 2010:12)。

#### 4.1.2 同僚間の呼称

同僚間では個人名で呼び合うのが88.1%で、“Polite Forms” は認められなかった。上司から部下及び同僚間で名字の呼び捨てが見られたが、軍隊や警察や学校のような規律の厳しいところで男性間で用いられるという指摘がある (Zwicky 1974:789)。しかし、親しい間柄で仲間意識を助長するために男性から女性を呼んだり (“Jones” Daniel to Bridget in *Bridget Jones's Diary* 2001 [イギリス映画])、親密な関係を装うために女性から男性を呼んだり (“Garfield” Kate to Garfield in *Other People's Money*) する例が見られる。

## 4.2 会社外の呼称

表 2：会社外 (ソト) の呼称分布 (Familiar Forms in italics)

顧客→業者 (85例)		業者→顧客 (90例)		同地位レベル間 (77例)	
<i>FN</i>	37 (43.5%)	<i>FN</i>	47 (52.2%)	<i>FN</i>	26 (33.8%)
<i>Familiarizers</i>	26 (30.6%)	TLN	16 (17.8%)	<i>FFN</i>	25 (32.5%)
<i>FFN</i>	19 (22.4%)	<i>FFN</i>	11 (12.2%)	TLN	12 (15.6%)
<i>Full Name</i>	2 (2.4%)	Honorifics (“sir”)	7 (7.8%)	<i>Familiarizers</i>	5 (6.5%)
<i>swear words</i>	1 (1.2%)	<i>swear words</i>	4 (4.4%)	<i>LN</i>	4 (5.2%)
		<i>LN</i>	2 (2.2%)	<i>Endearments</i>	2 (2.6%)
		“Congressman”	2 (2.2%)	<i>swear words</i>	2 (2.6%)
		<i>Familiarizers</i>	1 (1.1%)	<i>FLN</i>	1 (1.3%)

FN: First Name; FFN: Familiarized First Name; LN: Last Name; TLN: Title+Last Name; FLN: Familiarized Last Name

#### 4.2.1 顧客と業者間の呼称

顧客から業者への呼称は、個人名がその略称と合わせて65.9%と最も多く、次に“pal, buddy, sport<sup>(6)</sup>, scout, kid, buddy boy”の“Familiarizers”が30.6%である。しかし、“Familiarizers”は全て、*Wall Street*のGekkoがBudに対して用いたものであるから一般化は出来ない。この領域では“Polite Forms”は使われていなかった。フルネームは同じく*Wall Street*でGekkoがBudを仲間として受け入れ、それを確認させたい場面(“All right, Bud Fox. I want you to buy 20,000 shares of Bluestar. . .” (00:22:22); “Bud Fox, I can make you rich, pal.” (00:53:33))で使われている。業者から顧客も個人名使用が優勢(64.4%)である。「タイトル+名字」と“sir”の合計は25.6%であり、敬称使用の割合は個人名使用に比して低いことが分かる。

力関係の下から上への「名字のみ」の呼び捨てが使われている例は、*Wall Street*の中で、パイロット組合長がGekkoに向かって皮肉を込めて“Gekko. . . Nice to see you, Gekko.” (01:49:15)と吐き捨てるように言って決別する場面等で見られ、組合長の強い怒りがその呼び方で表現されている。

“Swear words”<sup>(7)</sup>(罵りの言葉)は連発するとその人物の人間性が疑われることになるが、*The Late Shift*で人との軋轢を繰り返す感情的なHelenは、気に入らないことがあると、身近な人間に対しても(“bastard” Helen to Jay), 社外の人間に対しても(“asshole” Helen to Gardner, President, NBC News)躊躇いなく用いる。他には、憤慨した場面でGekkoがBudに“sucker”( *Wall Street*)を、温和なJoggyがGarfieldには“son of a bitch”( *Other People's Money*)を使っている。

#### 4.2.2 同じ地位レベル間の呼称

この領域でも個人名の使用が66.3%と、最も多かった。社内の同僚間で抽出されなかった「タイトル+名字」が15.6%認められる。その用例は、好ましくない相手、気を使う相手(“Mr. Garfield” Coles to Garfield in *Other People's Money*), 親しくない相手(“Mr. Fox” Natalie to Bud in *Wall Street*)に対して使用されている。特に、*Other People's*

(6) 20世紀初頭にはスポーツ好きと関係なく、特にアメリカで一般的に若い男性にあてて使用されていたが、今日では知り合い、見知らぬ人を問わず男性を呼ぶ語となった(Dunkling 1990:218)。

(7) “dear”や“love”のような“endearments”(Leech 1999: 110-111), “positive epithets”(小田 2010: 113)は音韻的に近いもの、引き入れたいものの意を持つ“my”と結び付き(“my dear” “my love”), “idiot”や“bastard”のような“swear words”(McConnell-Ginet 2003, 2006: 78), “negative epithets”(小田 2010: 113)は音韻的に遠いもの、突き放したいものの意を持つ“you”と共起する(“you idiot” “you bastard”)傾向がある(北山 2013a: 75-76)。

*Money* では、New England Wire and Cable 社の乗っ取りを画策する Garfield に対して会社側の役員が阻止しようとしたり協力しようとしたりするのですが、会長（Andrew Joginson）、社長（Bill Coles）、役員（Mrs. B. Sullivan）が“Mr. Garfield”と呼んでいるのに対して、Garfield は、女性の Mrs. Sullivan 以外には、Joggy、Bill と個人名、略称を使っている。これにより、大株主となった Garfield が会社側の人間に自分の有利な力関係を誇示しているのが見てとれる。会社側の 3 人の「タイトル+名字」は、いずれも疎遠な関係で使用され、相手に対して距離を置くことで丁寧さを出そうとする話し手の気持ちを表している。

この領域での「名字」の呼び捨ては、*Wall Street* で Sir Wildman が通常は個人名で呼んでいる Gekko に株式の奪い合いを巡って激怒した場面で使用されている。

#### 4.3 アメリカ映画の会社内外の呼称使用

社内外の呼称分布を分析するにあたり、それぞれの領域での“Familiar Forms”と“Polite Forms”の使用状況を表 3 に記す。

表 3：会社内外の呼称使用（表 1、表 2 を参照）

Addresser→Addressee		Familiar Forms	Polite Forms	Total
社内	上司→部下 (+P, -D)	162/162 (100%)	0/162 (0%)	162
	部下→上司 (+P, -D)	103/203 (50.7%)	100/203 (49.3%)	203
	同僚間 (-P, -D)	59/59 (100%)	0/59 (0%)	59
社外	顧客→業者 (+P, +D)	85/85 (100%)	0/85 (0%)	85
	業者→顧客 (+P, +D)	65/90 (72.2%)	25/90 (27.8%)	90
	同地位レベル間 (-P, +D)	65/77 (84.4%)	12/77 (15.6%)	77
合計		539 (79.7%)	137 (20.3%)	676

+P: asymmetrical, -P: symmetrical, +D: distant, -D: close (Scollon et al. 1995, 2012)  
 $\chi^2_{(5)}=188.81, p<.05$

社内の呼称は上司から部下、同僚間で“Familiar Forms”のみが使用されていた。部下から上司へも“Familiar Forms”の使用が“Polite Forms”の使用より多かったが、僅かな差であるため対称的な使用とは言えない。つまり、部下から上司への呼称は「互いに対等である」というアメリカの「建前」とは一致せず、力関係に影響される非対称の呼称使用が約半数認められた<sup>8)</sup>。社外の呼称使用では、顧客から業者、業者から顧客、同地

(8) 北山 (2010: 8) のイギリス映画の分析によると、イギリスのビジネス場面では上司から部下、

位レベル間で、社内での使用と同様に“Familiar Forms”が“Polite Forms”より多かったため、会社内（うち）と会社外（ソト）とで呼称使用の差別化をしているとは言えなかった。ただ、業者から顧客に対しての方が社内の部下から上司に対してより“Familiar Forms”の使用が多く、社外の同地位レベル間の分布は、社内の同僚間の使用状況に比して“Polite Forms”が多く検出された。力関係（e.g. “Mr. Garfield” Joggy to Garfield in *Other People's Money*）、親疎の距離（“Mr. Fox” Natalie to Bud in *Wall Street*）、負荷の度合（e.g. “Mr. Garfield” Mrs. Sullivan to Garfield in *Other People's Money*）の要因が複数入り混じった状態で「タイトル+名字」等の“Polite Forms”が用いられている。

アメリカの呼称使用においては、話し手はその場での上記の要因により“Familiar Forms”と“Polite Forms”を使い分ける。力関係も相対的（“relative” Brown & Levinson 1978, 1987: 74）なものであるから、同人物を相手にしても状況で呼び方が変わる場合がある。*Wall Street*のBudは憧れの顧客であるGekkoに取り入ろうと、最初は“Mr. Gekko” “sir”を用い、受け入れられ自信がついてくると“Gordon”と個人名で呼ぶようになる。しかし、失敗の後、再挑戦を願い出る時は、“Mr. Gekko... One more chance, Mr. Gekko.”（00:32:38）と「遠隔的」（滝浦 2008）な呼称を用いる。また、Budは、社内先輩格の社員をLouと呼んでいるが、自分の傲慢さを反省した後はMr. Mannheimと距離を置いて呼び、その後、関係が修復すると、Louに戻している。

## 5. 日本映画に見る呼称

日本映画のビジネス場面から抽出された会社内の呼称は表4、会社外の呼称は表5の通りである。

### 5.1 会社内の呼称

表4：会社内（うち）の呼称分布（Familiar Forms in italics）

上司→部下（299例）		部下→上司（356例）		同僚間（126例）	
<i>LN+ “-くん”</i>	135 (45.2%)	Position title	264 (74.2%)	<i>LN</i>	52 (41.3%)

∟部下から上司、同僚間で個人名と略称の使用割合がアメリカより多く、全ての領域で対称的な結果であった。階級社会と言われるイギリスの方がビジネス場面では「建前」通りの呼称分布を呈している。

LN	64 (21.4%)	LN+“-さん”	63 (17.7%)	LN+“-さん”	29 (23.0%)
LN+“-さん”	32 (10.7%)	LN+Position title	21 ( 5.9%)	“おまえ”	19 (15.1%)
“おまえ”	16 ( 5.4%)	Position title+“-さん”	2 ( 0.6%)	LN+“-くん”	13 (10.3%)
“みんな”	7 ( 2.3%)	“先輩”	2 ( 0.6%)	LN+Position title	4 ( 3.2%)
“きみ”	7 ( 2.3%)	“おやじさん”	1 ( 0.3%)	Position title	3 ( 2.4%)
“まさま”	7 ( 2.3%)	FN+“-さん”	1 ( 0.3%)	“まさま”	3 ( 2.4%)
LN+Position title	5 ( 1.7%)	“おやじ”	1 ( 0.3%)	“おまえさん”	1 ( 0.8%)
Position title	5 ( 1.7%)	LN	1 ( 0.3%)	“新人”	1 ( 0.8%)
FN	5 ( 1.7%)			“あんた”	1 ( 0.8%)
“みなさん”	3 ( 1.0%)				
FN+“-ちゃん”	3 ( 1.0%)				
“あなた”	2 ( 0.7%)				
FN+“-さん”	2 ( 0.7%)				
“きみたち”	1 ( 0.3%)				
“二人”	1 ( 0.3%)				
“あんた”	1 ( 0.3%)				
Nickname	1 ( 0.3%)				
FN+“-くん”	1 ( 0.3%)				
FFN+“-ちゃん”	1 ( 0.3%)				

FN: First Name; FFN: Familiarized First Name; LN: Last Name

日本語の呼称の特徴は、(1)個人名を殆ど使用せず名字を使うこと、(2)役職名(“Position title”)と呼ぶことが多いこと、(3)接尾辞(-さん、-くん、-ちゃん)が使われること、(4)対称詞が多様であること、である。

#### 5.1.1 上司から部下への呼称

社内の上司から部下にあてた呼び方では、「名字+くん」が最も多く(45.2%)、次は、「名字のみ」(21.4%)、「名字+さん」(10.7%)と続く。「名字+くん」と「名字のみ」を合わせると、66.6%となる。「おまえ」、「きみ」、「あなた」、「きさま」、「あんた」のように話し手が相手を直接特定する対称詞は丁寧な呼称ではなく、上役から下役へか同僚間の使用となる。上司から部下へは11.0%、同僚間では19.1%使用されており、男性同士の呼び方として両領域で「おまえ」の用例が最も多い。「個人名」で呼ばれるのは、女性(例「みえさん」河原会長女性秘書から女性事務員『出世と左遷』)か若い社員(例「平太」西田課長代理から富島『鉄の骨』)である。部下を役職名で呼ぶのは上司を呼ぶ時とは丁寧さ

の度合が違うという指摘がある（田窪 1997, 2007:29）。自分より下の役職を使うのは必ずしも敬意を表することにはならないであろうが、距離を置き、正式な雰囲気醸し出す効果はあり、その意味で「名字のみ」や「名字+くん」を使用するよりもはるかに丁寧さが増すと言える（例「芝野取締役」塚本社長から芝野『ハゲタカ（2007）』；「尾形常務」松田社長から尾形『鉄の骨』）。

上司から部下に「名字+さん」で呼び掛ける場面が10.7%抽出された。この呼び方は、今回選択した20本の映画のうち、8本に現れる。幾つかの場面例は以下の通りである。

- (1) 「芝野さん」大賀新社長から芝野再生担当取締役『ハゲタカ（2007）』
- (2) 「大久保さん」加賀谷事業部長から大久保次長『陽はまた昇る』
- (3) 「竹中さん」永井専務から竹中推進部副部長『金融腐蝕列島 再生』
- (4) 「長岡さん」取締役から長岡営業部長『鉄の骨』
- (5) 「鷲尾さん」京助創業者家族重役から鷲尾重役『社葬』
- (6) 「花沢さん」篠田本部長から花沢特班部課長『集団左遷』
- (7) 「田端さん」井上部長から田畑事務員『戦士の資格』

これらから導き出される背景は、新任の上司と経験豊かな部下（(1)と(2)）、丁寧な物言いの上司（(2)と(3)と(4)）、部下より若い上司（(5)と(6)）、面識のない女性の部下（(7)）である。通常の呼び方よりも丁寧な呼称を使う理由は、話し手の性格もあるが、同じ社内（ウチ）にあっても、経験、年齢、性別等で完全に相手と同グループとみなせない話し手の意識が働いた結果とも言える。特に、『陽はまた昇る』の加賀谷は、大久保から「あの、事業部長、大久保さんというのを少しやめてくれませんか。」（00:18:28）と言われるが、学歴の差もあり、なかなか「大久保くん」「大久保」と言うことが出来ない。また、年齢は、部下に「遠隔的」な呼称を使用する際の要因の中で最も顕著に意識されるものであり、(6)『集団左遷』の中で篠田はモデルハウスの火災を故意に引き起こし、部員に歴大な心理的な損害を与えた花沢に対して、「花沢さん、あんた、何やったんだ。」（01:17:46）と緊迫した状況下でも年上の部下を「-さん」つけて呼んでいる。その他、部下から年齢差の少ない上司に向けて「先輩」という年齢に基づいた呼び方も見られた（『陽はまた昇る』『社葬』）。(7)『戦士の資格』の井上部長は解雇対象者の田端の面談が進むにつれ、彼女の有能さを認識すると、「田端さん」から「田端くん」へと呼び方を変えている。「-さん」から「-くん」へ、「-くん」から「名字のみ」へと呼称が変化するにつれて上司が部下を

自分の身近な存在として受け入れていく過程が見てとれる。

### 5.1.2 部下から上司への呼称

部下から上司へは、圧倒的に「役職名」が多い(74.2%)。「役職名+名字」(5.9%)と合わせると、80.1%に及ぶ。「役職名」は直示性のある対称詞とは違い、聞き手を名づけるのは話し手ではないから間接的な呼称となり上司や見知らぬ人に使えるのである(田窪1997, 2007:19)。「役職名」より丁寧さの度合いが低い呼び方として、部下から上司にあてて「名字+さん」が20本中15本の映画で使われている(17.7%)。用例は以下の通りである。

- (1) 「中沢さん」 島課長から中沢取締役『課長 島耕作2』
- (2) 「遠藤さん」 富島営業部員から遠藤営業課長『鉄の骨』
- (3) 「久山さん」 北野副部長から久山顧問『金融腐蝕列島 呪縛』
- (4) 「北野さん」 女性事務員から北野副部長『左遷』
- (5) 「芝野さん」 端末事業部社員から芝野再生担当取締役『ハゲタカ (2007)』
- (6) 「野々山さん」 横島営業本部取締役専務から野々山会長『兜町』
- (7) 「横山さん」 篠田本部長から横山副社長『集団左遷』

これらの呼称は、通常上司への呼び掛けとして使用されている「役職名」(80.1%)を使わない選択をしていることになるから、その背景に何らかの理由が存在すると考えられる。(1)と(2)はいずれも直属の上司で日常的に非常に近い関係にある人にあてたものである。(3)は年齢的にも地位的にもかなり離れた上司ではあるが、個人的にも親しく家族ぐるみの付き合いがある。これらは関係の親密さから選ばれた呼称である。(4)は女性事務員が、(5)は現場の社員が上司に向けて使用した呼称であるが、女性や現場の社員等、会社の序列外に位置する人々の場合、役職の呼び名を用いない例が見られる。上司を「名字+さん」で呼ぶことについては賛否両論がある。現代日本語研究会(2004:104)は、オフィスで最も一般的に使われている呼称は「名字+さん」であると述べており、小林(2004:117)は上司の年齢や性別に関わらず許容される呼び名であると論じている。これに対して、中崎(2002:12)は「名字+さん」は部下によって決して使用されてはいけぬ呼称であるとし、岡本(2010:59-60)も「役職名」が最適であり対称詞や名前は不適切であると論じている<sup>9)</sup>。(6)と(7)は部下が上司に対し、これまでの役職名(「会長」「副社長」)の呼び方

をやめて「名字+さん」「あなた」に切り替える場面に現れる。

- (8) 「野々山さん、今後あなたの指示を仰ぐつもりはありませんよ。あなたはもう御自分のエゴイズムを通すことしか考えていない。」(01:15:33) (横島から野々山『兜町』)
- (9) 「横山さん、贈収賄容疑で告訴できるんですよ。」(01:37:03) (篠田から横山『集団左遷』)

(8)は、横島が野々山から派閥争いに負けた責任を負わされかけた場面、(9)は篠田が横山の横暴ぶりにこれ以上我慢できない場面での発話である。親密さから「名字+さん」を使う関係ではなく、相手への強い怒りがその呼称を選ばせている。親密な場合は日常的に相手を「名字+さん」と呼んでいるが、否定的な激しい感情の場合は呼称に突然の変更が起きる。油井(2007:24)の指摘通り、同じ相手に違う呼称を使う時は関係に変化があった場合なのである。

上司と部下間の「名字+さん」の使用場面の上記分析を通じて、「名字+くん」、「名字+さん」、「役職名」の位置付けが検証可能となる。つまり、接尾辞としての「-さん」は「-くん」よりも丁寧であり、一方で「-さん」は名字を伴うことから「役職名」よりも直接的であり丁寧さは薄れる。それ故に、上司から部下への呼称としては、「名字+さん」は「名字+くん」よりも丁寧であり、部下から上司への呼び掛けは「役職名」より「名字+さん」は丁寧ではない。ここでの横島や篠田のように社会的な基準を逸脱して丁寧さの低い呼称を選ぶのは、個人としての「本音」の発露であり、相手の「顔」を潰す行為となり、関係修復は不可能であると考えられる。

尚、この領域で部下から上司に「名字のみ」の呼び捨てが使われた場面が1例あるが、これは『ハゲタカ(2007)』で芝野営業戦略部部長が塚本社長にあてた箇所である。芝野と塚本は元同僚で親しい間柄であり、芝野を入社させたのも塚本であるから、同僚間のような呼称を使用しているものと考えられる。塚本は芝野を「名字」の呼び捨てで呼ぶことは多いが、芝野はこの例のみである。

### 5.1.3 同僚間の呼称

同僚間の場合は「名字」の呼び捨てが41.3%で最も多く、「名字+くん」(10.3%)を合

---

(9) 米田(1990:22)は、部長は直属の部下だけに「さん」付けて呼ばれるのに対し、課長やそれ以下の役職者は大抵の下役から「さん」と呼ばれると述べている。

算すると、51.6%になる。「名字+さん」が23.0%で次に多く、「おまえ」は15.1%で3番目である。上司から部下へも使用された対称詞は、相手を直示するために日本語では目上の人には使わないのが普通である。大浜 et al. (2001: 345-346) の調査によると、日本語母語話者間の2,088の対話のうち、対称詞の出現は1.5%であったと示されている。また、梶原 (2004: 56) は、20歳から31歳までの母語話者が「あなた」をどの程度許容するかを調べ、結果として、恩恵を与えた年下には何の問題もなく使えるが、同年齢間では適切とは思えず、年上に対しては使用不可能であると指摘している。日本語は、「タテ社会」(中根 1967, 2005) の意識が強く、相手に対する直接的な表現を避ける傾向があるため、多くの人称詞は短命で、一人称と二人称の互換も見られた。「人称詞」という概念は明治時代初期の西洋文法の導入を機に発達したと論じられている(鈴木 1973, 2010: 140-141; 金水 1989, 1991: 98)。位置や方向等を表す語が間接的な人称詞として使われるようになり、時代の流れとともに次第に間接さ、丁寧さが失われ、相手を特定する直示性を有するようになって、上役への使用が不適切となったのである。時の推移につれて丁寧さが失われていく現象は英語の人称詞である“you”にも同様に見られ、中世において上役に丁寧呼び掛ける形として複数形が使われ出したが、やがて同レベルの人間を丁寧に呼ぶ言葉となり、最終的には相手を限定せず丁寧さもない呼称となった(Jespersen 1933: 137)。

## 5.2 会社外の呼称

表5：会社外(ソト)の呼称分布 (Familiar Forms in italics)

顧客→業者 (34例)		業者→顧客 (34例)		同地位レベル間 (62例)	
LN+“-さん”	12 (35.3%)	Position title	15 (44.1%)	Company name+“-さん”	26 (41.9%)
Position title	7 (20.6%)	LN+“-さん”	13 (38.2%)	LN+“-さん”	14 (22.6%)
Company name+“-さん”	4 (11.8%)	“あなた”	2 ( 5.9%)	Function/role	9 (14.5%)
“あなた”	4 (11.8%)	“このやろう”	2 ( 5.7%)	Position title	8 (13.9%)
<i>Company name</i>	2 ( 5.9%)	“あなた”	1 ( 2.9%)	LN+Position title	2 ( 3.2%)
<i>LN</i>	2 ( 5.9%)	“みなさま方”	1 ( 2.9%)	<i>LN</i>	2 ( 3.2%)
LN+“-くん”	1 ( 3.1%)			“あなた”	1 ( 1.6%)
LN+“-はん”	1 ( 3.1%)				
“まさま”	1 ( 3.1%)				

LN: Last Name

### 5.2.1 顧客と業者間の呼称

顧客から業者への呼称は、“Polite Forms”の「名字+さん」、「役職名」、「会社名+さん」で67.7%を占める。これは、会社内の上司から部下への“Polite Forms”が14.1%であるのと同対照的である。業者から顧客への呼び方では、「役職名」が44.1%で最も多く、同じく“Polite Form”である「名字+さん」が続く（38.2%）。同じ会社内の部下から上司への呼び方では、「役職名」を使用する割合が80.7%と多く、「名字+さん」が17.7%であったのに対して、ソトの存在である業者は「役職名」と「名字+さん」の件数は大きくは変わらない。

### 5.2.2 同じ地位レベル間の呼称

集団主義の特徴を示すように、個人をその人の名前では呼ぶのではなく「会社名+さん」で呼ぶ場合が41.9%で一番多い。顧客から業者への呼び方でも3番目に多い呼称として出現する。日本では自称詞（一人称詞）でも自分の氏名を告げずに「(三井)物産です。」や「(三菱)商事です。」のように、会社名で代用することがある。

## 5.3 日本映画の会社内外の呼称使用

社内外の呼称分布を分析するにあたり、それぞれの領域での“Familiar Forms”と“Polite Forms”の使用状況を表6に示す。

表6：会社内外の呼称使用（表4、表5を参照）

Addresser→Addressee		Familiar Forms	Polite Forms	Total
会社内	上司→部下 (+P, -D)	254 (84.9%)	45 (15.1%)	299
	部下→上司 (+P, -D)	4 (1.1%)	352 (98.9%)	356
	同僚間 (-P, -D)	90 (71.4%)	36 (28.6%)	126
会社外	顧客→業者 (+P, +D)	10 (29.4%)	24 (70.6%)	34
	業者→顧客 (+P, +D)	5 (14.7%)	29 (85.3%)	34
	同地位レベル間 (-P, +D)	3 (4.8%)	59 (95.2%)	62
合計		366 (40.2%)	545 (59.8%)	911

+P: asymmetrical, -P: symmetrical, +D: distant, -D: close (Scollon et al. 1995, 2012)  
 $\chi^2_{(5)} = 573.03, p < .05$

“Familiar Forms”は会社内（ウチ）の上司から部下と同僚間で優勢であり、部下から上司及び会社外（ソト）の領域では、“Polite Forms”の使用が目立った。社内においては

上司と部下間で非対称的な呼称の使用が認められ、社外の人間に対しては、顧客から業者と同じ地位レベルの人間同士も社内とは全く違った呼称使用を行っていることが明らかになった。つまり、ウチとソトでは呼称の丁寧さが一定ではなくウチ・ソトの領域による呼称の差別化がなされていることになる。

## 6. 米語と日本語の呼称比較

米語と日本語での“Familiar Forms”と“Polite Forms”の比率を再度まとめると以下ようになる。

表7：米語と日本語の呼称比率（表3，表6を参照）

Addresser→Addressee		米語 (%)		日本語 (%)	
		Familiar Forms	Polite Forms	Familiar Forms	Polite Forms
社内	上司→部下	100	0	84.9	15.1
	部下→上司	50.7	49.3	1.1	98.9
	同僚間	100	0	71.4	28.6
社外	顧客→業者	100	0	29.4	70.6
	業者→顧客	72.2	27.8	14.7	85.3
	同地位レベル間	84.4	15.6	4.8	95.2

上表から、アメリカでは会社内外を問わず、“Familiar Forms”が多く使用され、日本では、社内の上司から部下へと同僚間で“Familiar Forms”が、その他の領域では“Polite Forms”が優勢であることが再確認できる。ここからアメリカにおいては社内（ウチ）と社外（ソト）で呼称の丁寧さのレベルを違えることはないが、日本では社外に対しては社内より丁寧な呼称を使う傾向が認められる。ただ、アメリカでは社内の部下から上司への呼称の分布が“Familiar Forms”と“Polite Forms”で大差がなく、上司から部下への分布とは対称的な呼称の使用ではなかったことから、社内では完全な「水平型社会」というより「垂直型社会」の傾向もあると指摘できる。日本は社内では明らかに「垂直型社会」の様相を呈している。一方、社外の人間には互いに距離を置いた呼称を用いている。

“Familiar Forms”，“Polite Forms”という二種類の呼称の中で各領域を通して最も多く使われた呼び方を米語で3つ、日本語で4つ挙げ、以下の表にまとめる。

呼称に見る文化的「建前」の検証（北山）

表 8：使用頻度上位の呼称（表 1，表 2，表 4，表 5 参照）

		社 内 (%)			社 外 (%)		
		上司→部下	部下→上司	同僚間	顧客→業者	業者→顧客	同レベル間
米国	FN	74.1	42.4	62.7	43.5	52.2	33.8
	FFN	17.3	5.0	25.4	22.4	12.2	32.5
	TLN	0	32.5	0	0	17.8	15.6
日本	役職名	3.4	80.7	5.6	20.6	44.1	17.1
	LN+さん	10.7	17.7	23.0	35.3	38.2	22.6
	LN+くん	45.2	0	10.3	3.1	0	0
	LN	21.4	0.3	41.3	5.9	0	3.2

FN: First Name; FFN: Familiarized First Name; LN: Last Name; TLN: Title+Last Name

アメリカでは FN と FFN の使用が多く、TLN は社内の部下から上司へ、社外の業者から顧客へと同地位レベル間で抽出された。ただ、FFN の使用は話し手からのより「近接的」な意識を表すため、社内外ともに下から上への用例（5.0%；12.2%）は上から下や同じレベル間の使用に比べると少なかった。一方、日本では社内の部下から上司へ、社外の業者から顧客へは「名字+役職名」を含む「役職名」が多く使われ、社内の上司から部下へは「名字+くん」が、同僚間では「名字のみ」が、社外の顧客から業者へと同地位レベル間で「名字+さん」が多かった。

表 9 で FN と LN の分布をアメリカと日本で比較する。

表 9：米国と日本での FN と LN の使用頻度比較（表 1，表 2，表 3，表 4 参照）

	米 国	日 本
First Name	461/676 (68.2%)	13/911 ( 1.4%)
Last Name	114/676 (16.9%)	466/911 (51.2%)

$\chi^2_{(1)} = 631.02, p < .05$

アメリカでは略称も含めた個人名の使用が過半数を超え、名字はその四分の一の使用頻度であった。その他には、“Endearments”（社内の上司から部下と同僚間、社外の同地位レベル間）や“Familiarizers”（社内の上司から部下、社外の 3 方向）や“Honorifics”（社内の部下から上司、社外の業者から顧客）が用いられている。一方、日本では、名字の使用が呼称全体の半数強であり、個人名は社内の女性か若い社員に対する上司から部下への使用と、部下から若い上司への用例に限定され、社外の人間に対しては用いられていなかった。日本では、特に上役に対しては、個人名のみならず名字の使用も、アメリカで一

義的に使われる個人名の使用ほど多くなく、相手を名指ししない「遠隔的」な「役職名」が最も丁寧度が高い呼び方として使われている<sup>00</sup>。他に使用されていた呼称は、「おまえ」「あなた」等の対称詞（社内の部下から上司を除く全領域）、「会社名+さん」（社外顧客から業者と同地位レベル間）であった。

## 7. 結 論

これまでの分析で明らかになったように、アメリカでは社内外ともに主に個人名の呼称が優勢であり、総じて領域を問わず「近接的」な呼称分布が見られた。互いの“positive face”を満たし、“positive politeness strategy”により呼称選択がなされている。ウチとソトとの区別もなく、その意味では水平型社会を呈していると言うことが出来る。但し、社内の部下から上司にあてた呼称では“Familiar Forms”と“Polite Forms”の差が僅かであったことから、社内の上司と部下間の呼称使用は完全には対称的であるとは言えず、その領域では力関係による呼称の選択が行われ、上司から部下には直接的、「近接的」な呼び方のみが、部下から上司には間接的、「遠隔的」な呼び方が半数近く使われていた。対称的ではない呼称使用に基づく「力」の関係は静的な社会形態に現われるという指摘（Clyne, Norrby & Warren 2009: 28）があるが、アメリカは流動性のある社会で、「静的」ではない。しかし、社内の上司と部下との関係は、親密さを伴う「団結心」（“solidarity”）（Brown & Gilman 1960: 256-260）の要素と同様な程度に垂直的な「力」（“power”）（ibid.）の要素が認められた。それ故、この領域では「互いに対等である」というアメリカの「建前」には矛盾が出てくるのである。

日本のビジネス界では、親しさの度合を問わず、個人名が使われることは殆どなく、名前の使用が一般的であった。社内（ウチ）と社外（ソト）で呼称の使い方が変わり、ソトの人間に対しては「会社名+さん」や「名字+さん」といった間接的で「遠隔的」な呼称使用が優勢であった。ウチの上司から部下と同僚間では「名字+くん」や「名字のみ」の“Familiar Forms”が多く、直接的で「近接的」であるがゆえに丁寧さのない呼称使用と

<sup>00</sup> 日本の家族では皆から名前では呼ばれるのは一番年下の子供である。年上（目上）は名前ではなく「お父さん」や「お兄ちゃん」といった「役割語」（金水 1989, 1991）で呼ばれる。この基準は家族外にも適用され（鈴木 1973, 2010: 151-156）、上役（年功序列制では大抵が年上）は名前ではなく役職や役割の言葉（学校では「先生」）で呼ばれるのが一般的である（Kitayama 2013b: 459）。名前が使われるのは役職や役割に付けて（鈴木 1973, 2010: 151-156）呼ばれる（「田中課長」「田中先生」）場合である。この、相手を特定しない「敬避的」（滝浦 2008）な呼称の用法は英国において召使が貴族を身分やその状態を使って間接的に相手と呼ぶ“my lord/lady”や“your lordship/ladyship”にも見られる（北山 2013a）。

なっている。部下から上司へは「役職名」や「名字+さん」といった間接的で「敬避的」な呼称が使用されている。同僚間での対称的な呼称使用による親密さの表明とは違い、上司と部下の間には「力」の差による非対称な呼称が認められる。長年に渡る「静的」な「垂直型タテ社会」の存続で、相手と距離を取りその領域に踏み込まない“negative face”尊重の“negative politeness strategy”が上役に対して、そして、ソトの人間に対して使われる。

個人主義社会の「独立型自己」として個人がその場の状況に応じて呼称を選ぶアメリカでは、*The Insider* での先輩社員に向けての Bud や、Gekko に向けての Bud や Wildman の呼び方の変遷のように、相手との力関係、親疎の距離、負荷の度合いでどのようなコミュニケーション上の方略を用いるかが決まるが、集団主義の日本では個人は集団の期待する基準に則って呼称を使い分ける。従って、『兜町』の横島や『集団左遷』の篠田のようにその基準を逸脱するのは典型的な「依存型自己」ではなく、個人の強い意志（「本音」）の現れであり、「建前」からくる円滑なコミュニケーションから外れる結果となるのである。

このように、アメリカ文化と日本文化では、「ポライトネスとは何か」の意味の違いにより“Familiar Forms”と“Polite Forms”という二種類の使用呼称の分布に相違が生じ、更に、個人と集団との関わり方の違いにより、使われる呼称が個人を特定する個人名か個人を直示しない名字や役職名かが決定される。つまり、個人主義の「独立型自己」間では、個人（“private self”）対個人（“private self”）の関係の中で相手の“positive face”か“negative face”のどちらの“self-face”をどの程度満足させるかが呼称使用の根本となるが、集団主義の「依存型自己」間では個人（“public or collective self”）の選択範囲は制限を受け、集団内の成員としての相手に対して「垂直型社会」の規範が要求する呼称を用いて互いの立場に配慮しながら（“other-face and mutual-face concerns”）呼称を選択すると結論付けることが出来るのである。

### Featured Films

アメリカ映画：

*Devil Wears Prada, The.* (2006) Directed by David Frankel. Written by Lauren Weisberger.

Screenplay by Aline Brosh McKenna. Twentieth Century Fox Film Corporation.

*Insider, The.* (1999) Directed by Michael Mann. Written by Eric Roth and Michael Mann.

Buena Vista International/Touchstone Pictures.

*Late Shift, The.* (1993) Directed by Betty Thomas. Screenplay by Bill Carter and George Armitage.

HBO Pictures.

*Nine to Five.* (1980) Directed by Colin Higgins. Screenplay by Colin Higgins and Patricia Resnick. Twentieth Century-Fox Film Corporation.

*Other People's Money.* (1991) Directed by Norman Jewison. Written by Jelly Stainer. Screenplay by Alvin Sargent. Warner Brothers Pictures.

*Secret of My Success, The.* (1987) Directed by Aj Carothers. Screenplay by Jim Cash, Jack Epps, Jr. and Aj. Carothers. Universals.

*Two Weeks Notice.* (2002) Directed by Marc Lawrence. Written by Marc Lawrence. An AOL Time Warner Company.

*Up Close & Personal* (1996) Directed by Jon Avnet. Screenplay by Joan Didien and John Gregory Dunne. Cinergi.

*Wall Street.* (1987) Directed by Oliver Stone. Written by Stanley Weiser and Oliver Stone. Twentieth Century Fox Film Corporation.

*Working Girl.* (1988) Directed by Mike Nichols. Written by Kevin Wade. Twentieth Century Fox Film Corporation.

日本映画：

『ハゲタカ』(2007) 演出：井上剛，堀切園健太郎，大友啓史 原作：真山仁 脚本：林宏司 NHK

『ハゲタカ』(2008) 演出：大友啓史 原作：真山仁 脚本：林司 東宝

『ヘッドハンター』(1990) 演出：福田新一 原作：江波戸哲夫『ヘッドハンター』筑摩書房 脚本：永原秀一 TBS

『陽はまた昇る』(2002) 監督：佐々部清 原作：佐藤正明『映像メディアの世紀ビデオ・男たちの産業史』日経 BP 社 脚本：西岡琢也，佐々部清 東映

『兜町』(1989) 演出：近藤邦勝 原作：江波戸哲夫『疑惑株』徳間書店 脚本：横田与志 TBS

『課長 島耕作』(1992) 監督：根岸吉太郎 原作：弘兼憲史『課長 島耕作』講談社週刊モーニング 脚本：野沢尚 東宝

『課長 島耕作』(2008) 演出：杉本達 原作：弘兼憲史『課長 島耕作』モーニング KC 講談社 脚本：君塚良一，北川大樹 日本テレビ

『課長 島耕作2 香港の誘惑』(2008) 演出：大塚恭司 原作：弘兼憲史『課長 島耕作』モーニング KC 講談社 脚本：君塚良一，北川大樹 日本テレビ

『君たちに明日はない』(2010) 演出：岡田健 原作：垣根良涼介『君たちに明日はない』『借金取りの王子』新潮社 脚本：宅間孝行 NHK

『金融腐食列島 呪縛』(1999) 監督：原田真人 原作：高杉良『呪縛 金融腐食列島』角川書店 脚本：高杉良，鈴木智，木下麦太 東映

『金融腐食列島 再生』(2002) 監督：佐藤純彌 原作：高杉良『続・金融腐食列島 再生』角川書店 脚本：鈴木智，佐藤純彌 BS-i toskadoma!n

『燃ゆるとき』(2006) 監督：細野辰興 原作：高杉良『ザ エクセレントカンパニー/新燃ゆるとき』『燃ゆるとき』角川文庫 脚本：鈴木智 東映

『レガッター国際金融戦争』(1999) 演出：(第一回・最終回) 大友啓史 (第二回) 高橋練 脚本：仲倉重郎，江口美喜男 NHK

『左遷』(1990) 演出：高橋一郎 原作：江波戸哲夫『総合商社』講談社 脚本：横田与志 TBS

『戦士の資格』(2008) 演出：小原一隆 脚本：高橋幹子 フジテレビ

『社葬』(1989) 監督：舛田利雄 脚本：松田寛夫 東映

『集団左遷』(1994) 監督：梶間俊一 原作：江波戸哲夫『集団左遷』世界文化社 脚本：野沢尚 東映

『出世と左遷』(1996) 監督：坂崎彰 原作：高杉良『人事権!』講談社 脚本：岩間茂樹 TBS

『空飛ぶタイヤ』(2009) 監督：麻生学，鈴木浩介 原作：池井戸潤『空飛ぶタイヤ』実業之日本社 脚本：前川洋一 Sony Pictures

『鉄の骨』(2010) 監督: 柳川強, 松浦善之助, 須崎岳 原作: 池井戸潤『鉄の骨』講談社 脚本: 西岡琢也 NHK 名古屋放送局

参 考 文 献

- Argyle, M. (1994, 1995) *The psychology of social class*. London: Routledge.
- Austin, J. L. (1962) *How to do things with words* (ed. by J. O. Urmson & M. Sbisà 1975). Oxford: Clarendon Press.
- Backnik, J. M. (1982) Deixis and self/other reference in Japanese discourse. *Sociolinguistic Working Paper* 99: 1-36. Austin, Texas: Southwest Educational Development Laboratory.
- Baumeister, R. F. (1986) *Public self and private self*. New York: Springer.
- Braun, F. (1988) *Terms of address: Problems of patterns and usage in various languages and cultures*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Brown, P., and S. C. Levinson. (1978, 1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brown, R., and M. Ford (1964) Address in American English. In D. Hymes (ed.), *Language in culture and society: A reader in linguistics and anthropology*. New York: Harper & Row, pp. 234-244.
- Brown, R., and A. Gilman (1960) The pronouns of power and solidarity. In T. A. Sebeok (ed.), *Style in language*. London: Wiley & Sons, pp. 253-276.
- Clyne, M., C. Norrby, and J. Warren (2009) *Language and human relations: Styles of address in contemporary language*. New York: Cambridge University Press.
- 土居健郎 (1971, 2005) 『「甘え」の構造』東京: 弘文堂.
- Dunkling, C. (1990) *A dictionary of epithets and terms of address*. London: Routledge.
- 現代日本語研究会(編) (2002, 2004) 『男性の言葉: 職場編』東京: ひつじ書房.
- Greenwald, A. G., and A. R. Pratkanis (1984) The self. In R. S. Wyer, and T. K. Srull (eds.), *Handbook of social cognition* Vol. 3. Hillsdale, NJ: Erlbaum, pp. 129-178.
- Hill, B., S. Ide, A. Kawasaki, and T. Ogino (1986) Universals of linguistic politeness: Quantitative evidence from Japanese and American English. *Journal of Pragmatics* 10.3: 347-371.
- Hofstede, G. (1980, 2001) *Culture's consequences: International differences in work related values*. Beverly Hills, California: Sage Publications.
- Ide, S. (1982) Japanese sociolinguistics: Politeness and women's language. *Lingua* 57.2-4: 357-385.
- Ide, S. (1989) Formal forms and discernment: Two neglected aspects of universals of linguistic politeness. *Multilingua* 8.2-3: 223-248.
- Ide, S., B. Hill, Y. Carnes, T. Ogino, and A. Kawasaki (1992) The concept of politeness: An empirical study of American English and Japanese. In R. J. Watts, S. Ide, and K. Ehlich (eds.), *Politeness in language: Studies in its history, theory, and practice*. Berlin: Mouton de Gruyter, pp. 281-297.
- Jespersen, O. (1913) *Essentials of English grammar*. London: George, Allen & Unwin.
- 梶原真樹子 (2004) 日本語における対称詞「あなた」の使用領域について『信州大学留学生センター紀要』第5号: 47-57.
- 金井勇人 (2002) 失礼さという観点から見た二人称指示の体系 *Waseda University Postgraduate Literature Course Journal* 48.3: 83-91.
- Kasper, G. (1990) Linguistic politeness: Current research issues. *Journal of Pragmatics* 14.2: 193-218.

- 金水敏 (1989, 1991) 代名詞と人称『講座 日本語と日本語教育：日本語の文法・文体』第4巻 東京：明治書院, pp. 98-116.
- 北山環 (2004) アメリカ映画に見るポライトネスの一考察：1980年代から1990年代のビジネス場面におけるリクエスト表現の分析『近畿大学語学教育部紀要』第4巻第1号：65-125.
- 北山環 (2007) 日本文化：その形成と表出：西洋文化に対峙するものとして『語学教育部ジャーナル』第3号：59-85.
- 北山環 (2010) 呼称に見られる「建前」と「本音」：映画のビジネス場面における呼び名を分析して『語学教育部ジャーナル』第6号：3-23.
- 北山環 (2012) 後置呼称 ('Final Vocatives') の特性に関する一考察：Leech 試論の検証『近畿大学教養・外国語教育センター紀要 (外国語編)』第2巻第2号：77-91.
- 北山環 (2013a) 'My Lord/Lady vs. 'Your Lordship/Ladyship : ポライトネスからの考察『近畿大学教養・外国語教育センター紀要 (外国語編)』第3巻第2号：63-80.
- Kitayama, T. (2013b) The distribution and characteristics of Japanese vocatives in business situations. *Pragmatics* 23.3: 447-479.
- 北山環 (2013c) 『ビジネス場面におけるポライトネスの考察：アメリカ・イギリス・日本映画に表れる依頼・対立・謝罪表現の分析』大阪：大阪教育図書.
- 小林美恵子 (2002, 2004) 職場で使われる「呼称」現代日本語研究会 (編)『男性の言葉：職場編』東京：ひつじ書房, pp. 99-119.
- Lebra, T. S. (1976) *Japanese patterns of behavior*. Honolulu: University Press of Hawaii.
- Leech, G. (1999) The distribution and function of vocatives in American and British English conversation. In H. Hasselgård, and S. Oksefjull (eds.), *Out of corpora: Studies in honour of Stig Johansson*. Amsterdam: Rodopi, pp. 107-118.
- Leeds-Hurwitz, W. (1980) The use and analysis of uncommon forms of address. *Sociolinguistic Working Paper* 8: 1-18.
- Levinson, S. C. (1983) *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Markus, H. R., and S. Kitayama (1991) Culture and self: Implications of cognition, emotion and motivation. *Psychological Review* 98: 224-253.
- Matsumoto, Y. (1988) Reexamination of the universality of face: Politeness phenomena in Japanese. *Journal of Pragmatics* 12: 403-426.
- McConnell-Ginet, S. (2003, 2006) "What's in a name?": Social labeling and gender practices. In J. Holmes, and M. Meyerhoff (eds.), *The handbook of language and gender*. Malden, MA: Blackwell Publishing, pp. 69-97.
- Morisaki, S., and W. Gudykunst (1994) Face in Japan and the United States. In S. Ting-Toomey (ed.), *The challenge of facework*. Albany: State University of New York, pp. 47-93.
- 中根千枝 (1967, 2005) 『タテ社会の人間関係：単一社会の理論』東京：講談社.
- Nakane, C. (1970, 1998) *Japanese society*. Tokyo: Charles G. Tuttle.
- 中崎温子 (2002) もらう系コミュニケーションにおける「話し手主観性」と人称ハイラーキー『言語と文化』15：1-20.
- 小田希望 (2010) 『英語の呼びかけ語』大阪：大阪教育図書.
- 岡本真一郎 (2000, 2010) 『ことばの社会心理学』京都：ナカニシヤ出版.
- 大浜るい子, 荒牧ちさ子, 曾儀婷 (2001) 日本語教科書に見られる自称詞・対称詞の使用について『中国四国教育学会教育学研究紀要』第47巻第2部：342-352.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (eds.) (1985) *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.
- Sakamoto, N., and R. Naotsuka (1982, 1998) *Polite fictions: Why Japanese and Americans seem rude to each other*. Tokyo: Kinseido.
- Scollon, R., and S. W. Scollon (1995, 2002) *Intercultural communication*. Oxford: Blackwell Publishing.

呼称に見る文化的「建前」の検証（北山）

- Scollon, R, S. W. Scollon, and R. H. Jones (1995, 2012) *Intercultural communication: A discourse approach*. Chichester: Wiley-Blackwell.
- Spencer-Oatey, H., and P. Franklin (2009) *Intercultural interaction: A multidisciplinary approach to intercultural communication*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- 鈴木孝夫 (1973, 2010) 『言葉と文化』東京：岩波書店.
- 滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』東京：研究社.
- 田窪行則 (編) (1997, 2007) 『視点と言語行動』東京：くろしお出版.
- Thomas, J. (1995) *Meaning in interaction: An introduction to pragmatics*. London: Longman.
- Ting-Toomey, S., and J. G. Oetzel (2002) Cross-cultural face concerns and conflict styles. In W. B. Gudykunst, and B. Mody (eds.), *Handbook of international and intercultural communication* 2<sup>nd</sup> edition. Thousand Oaks: Sage Publications, pp. 143-163.
- Triandis, H. C. (1972) *The analysis of subjective culture*. New York: Wiley-Interscience.
- Triandis, H. C. (1989) The self and social behavior in differing cultural contexts. *Psychological Review* 9.6: 506-520.
- 和辻哲郎 (1979, 2006) 『風土』東京：岩波書店.
- 米田正人 (1990) ある社会組織の中の呼称：夫婦の呼び方と職場での呼び方について 『日本語学』 9.9 : 19-24.
- 油井恵 (2007) 日本語および英語における対称詞の機能：ポライトネスとの関連性 『駿河台大学論叢』 33 : 19-30.
- Zwicky, A. M. (1974) “Hey, whatsyourname !” *Chicago Linguistics Society* 10: 787-801.